

17世紀イングランド常備軍論争 7-1

藤原 浩一

A Short
HISTORY
OF
Standing Armies
IN
ENGLAND.

————— *Captiq; dolis, donisq; coacti,*
Quos neq; Tydides, nec Larissæus Achilles,
Non anni domuere decem, non mille Carinæ.
Virg. Æn. ii.

L O N D O N,
Printed in the Year MDCXCVIII.

イングランドにおける常備軍の簡略史¹

(iii)

序文

政治体制について語るとき、人間の普遍性がこれほどまで多く誤解される例はありません。その様々な結果は誰にも明らかですがその原因を突き止めることはほとんど誰にとっても不可能です。多くの人々は人間の一般原理の本質についての考えが未熟であり、世の中の政府のあらゆる失敗を人間の墮落のせいにしています。国全体が汚染され、改革は不可能だと考え、自国の災難を辛抱強く耐えしのぶか、またはその利権の分け前にあずかっているのです。いっぼうこの種の不平は世界の歴史と同じぐらい古く、どの時代の人々も自分たちの時代が最悪だと思ってきました。我々は自分たちの経験だけでなく、あらゆる時代において同様な状況にある人々は、どのように呼ぼうとも、同様な行動をとるようです。政府は時計仕掛けのようなものに過ぎません。同様なゼンマイと歯車が規則正しく機能をはたさなければなりません。それゆえに政府を構築するには公の利益にかなう活動をするように組み立てる技術が大切なのです。あらゆる人間が自分自身の利益のために行動することは明らかです。そしてすべての賢明な政府はその原則に則って設立されています。したがってこのすべての秘訣はただ統治者の利益と被統治者の利益を同じものにするだけです。絶対君主制では、全権力を単独の人間が握り、彼の利益だけが重視されます。貴族制では少数の人々の利益が重視されます。そして自由政府では全員の利益が重視されます。最近我が政体にまぎれこんだいくつかの悪習を取り除くことができれば、これこそイングランドの状況といえるでしょう。この王国の自由は国民の下院議員選出方法にかかっています。下院は行政府の一部であり、資金を支出する唯一の権限を持っています。もし下院が真の代表者で、外部からの圧力や個人が汚職を免れていれば、自分たちが公共の利益と考えたもの以外は何も通過させないでしょう。なぜなら彼ら自身の利益は国民の利益と密接に織り合わさっており、彼らが自分たち自身のために行動すれば（誰でも

iv

可能な限りそうするでしょうが) それはイングランドの共通の利益のために行動していることになります。そしてもし彼らの中に権力を乱用することが自分たちの利益になるなどと思うような人がいれば、そのような考えをいだく人々を罰することが他の人々全員の利

益となるでしょう。そして我が国政府は機械的に行動し、時がくれば時計が十二時を打つように、当然のことながら悪事をはたらくものは絞首刑となるでしょう。これこそが国民が自分たちの幸福を期待し、自分たちの不平の救済を期待するよりどころとなるのです。そしてもし我々が彼らを墮落させずにおければ、彼らは他の人々も皆墮落しないように注意を払うでしょう。我が国の政体は（チャールズ二世の治世²までは）そのような体制であったように思われます。国民を脅迫して従属させるために国王が傭兵を雇うことは認めませんでした。また国民を買収して従属させるほど高い役職や収入を与えることも認めませんでした。国王が贈り物にする高位の役職数はごく少なく、そのほとんどは一代限りの特権であり、その他の高位の役職、すなわち大蔵卿、財務卿、王璽尚書、海軍卿などは個々の人物が掌握して享受しており、下院議員がそのような役職に就くことはありませんでした。そしてこれらの役職が貴族によって保有されている場合、下院が彼らの行為の厳しい審査官でした。イングランド政府はこのような状況のままローマ人がこの島から撤退したのち、チャールズ一世³の時代まで続いていたのです。チャールズ一世は下院で高い評価への道にみずから反対したと記録されている最初の人物です。この件に関してストラフォード伯爵⁴とノイ⁵は偉大な愛国者から専制君主の主要な擁護者となった顕著な例でした。しかしこれはその他の人々を憤慨させただけでした。というのは、国王は期待していた人々全員に与えるだけの役職も、十分な買収資金も有していなかったからです。国民から多くの資金を集めたことは事実ですが議会の承認もなく、彼を守る軍隊もなく、その資金集めには非常な困難がとれない、国王にとってはほとんど意味が無く、結局のところ、

v

長く悲惨な戦争という手段によってある専制から別の専制へ我々を導いただけでした。そして国王自身の破滅に終わったのです。というのは、軍隊が自分たちの手中に全権力を掌握し、軍議によって国家を支配した結果、全党派が一致してチャールズ二世を招き入れることになりました。したがって彼は国民の広い支持のもとに帰国したのです。そして国民はある意味、一時的な興奮状態で彼に生涯莫大な資金を与えたのです。この資金によって彼は軍隊の召集が可能となり、議会を買収することも出来ました。彼はそれを適切に実行したのです。しかし贅沢好きな君主であった彼は一度に大金を手放すことは出来ず、下院議員にその日暮らしの費用しか与えませんでした。それで彼らは自分たち自身が国王を必要とするのと同様に、国王を常に自分たちに依存させておくことが必要だと気づいたのです。国王が自分たちにとって絶対に必要である限り現金を渡してくれることを知っていました。そして彼が議会で多数を確保するためには自分が自由にできる官職の数が不十分で

した。というのは当初役職を分割したり、複数化したりする方法には気づいていませんでした。一人の大蔵卿の代わりに五人の大蔵卿をおいたり、七人の税関員や、九人の収税官や、十四の海軍事務所、十の郵便事務所、四つの輸送機関、四つの馬車事務所、四つのワイン免許事務所、四つの食糧事務所、そのほか多数のその他の役所をおいたりして、数えあげればきりがありません。これらのうちどれかの役職につけた幸運な人々は、それらの役職が多くの人にあてがわれて以来、少数の人々の手にあったときよりこれほど見事に遂行されたことはないといえば、ほめ言葉と考えられるでしょう。そして議会によって定数が定められていなければ、なぜ二倍の数にされないのでしょうか。また無限に増やすことはできないのかと言わざるをえません。そして我が国の政体にとってこれがどのように危険なものになるだろうかと、私は恐れています。というのは将来、もしそれらの役職がすべて議員に与えられれば、これまで大いに自慢してきた我が国の自由はどうなるのでしょうか。犯罪者が判事になったらどうすればよいのでしょうか、犯罪者に自分たちの裁

vi

判を任すのでしょうか。共通の危険が彼らを団結させ、全員がお互いに助け合うでしょう。私はたんなる想像で言っているのではありません。というのは、何年間も続けて処理を誤ったまま、誰も処罰されたことがない国のことを読んだことがあります。そして我が国でも、ある時代のことを記憶しておられる方もあるでしょう。もしも国王自身が自由に任用できる役職がさらに二十もあったとすれば、または最高位にある人々を自由にできたとすれば、イングランドの自由は終わりを告げていたでしょう。議員が役職に就く余地を与えてはいけないうのだととらえられれば、それは考え違いです。というのは、人間は二つの能力で国家に奉仕できるからです。しかし私はそれが役職につくための資格とは思いません。なぜならある貧乏な地区がある人物を地域代表としたいと考えれば、それは国会議員、法律家、兵士、提督ということになるでしょうし、他の職業もあるでしょう。もしこの方法が将来の治世において採用されたとしても、彼らが下院で国家にあたえる害悪によって在職していたり、また主要な反対党派によって追い出されてしまうことが確実だったりするようであれば、国民は能力のある人物や高潔な人物が役職につくことを期待してはいけません。下院が国王や国民のどちらかの利益になるように力強く活動する姿を目にすることは決して期待できません。そうではなく自分たちの地位を守るために宮廷に追従するものもでてくるでしょうし、その地位を手に入れるために不当にもそれに反対するものもあるでしょう。そして自分たちの国家の利益になることを考えている人々は、我が政体そのものに欠点があると考え違いをして、世界で最善の政府の形態に不満を抱くよ

うになるでしょう。ある国では年間三万ポンドの値打ちのある役職について争い、自堕落な追従や、政治機構を公然と妨害したりして、六百万ポンドを浪費したという話しを耳にしたことがあります。それはあらゆる種類の人々に欲望と窮乏をもたらし、賄賂や背信、冒瀆、無神論、放蕩、贅沢そして怠慢で腐敗した政府に付随するあらゆる悪徳をもたらし、大衆のことは広く忘れ去られました。一方の極端から反対側の極端に走ることは自然であり、この方針は最終的にはそれを用いているすべての宮廷にも向けられるでしょう。

vii

もし彼らが議員にすべての役職を与えようとすれば、国民は彼らに何も与えることができなくさせる法律を作ることが必要だと考えるでしょう。それはこの我々の時代ですでに何回か試みられました。実際に、その下院に不正な方法ではなく、少数の役職を持った人々が自然に入ってきて大した不都合はないかも知れませんが、多くの議員が役職を持つようになれば我々にとって致命的になります。というのは、すべての賢明な政府は立法府と行政府をお互いに牽制できるように可能な限り別々にしようと努力しています。我が国政府は拒否権以外、立法府の一部たりとも国王に任せるべきではありません。それは行政府を守るために絶対に必要なことです。下院の義務の一部は犯罪者を罰することであり、政府の執行機関によってなされた苦情を取り除くことです。そして彼らみずからが絞首刑を覚悟し、自分たち自身を溺死させるほどの公共心がないかぎり、同一人物によってそのような苦情がもたらされた場合にはどのような処理が可能でしょうか。

しかし私の考えでは、同様に重要なことですが、別の面でチャールズ二世の時代に我が国の政体から逸脱してしまいました。というのは犯罪者を罰する能力はありましたが、それでも、我々は犯罪者が法律的にどのようなものなのか十分には理解していなかったのです。法律は常に国王個人にとってはきわめて扱いにくい問題でした。それゆえに小さな過失であれば国王がその責任を問われることはなく、大臣が責任を負うように政府の執行部が適切な手続きを経て処理してきました。国璽は首相によって保管され、国王の収入は会計係によって、国王の法律は裁判官によって実行されています。国王の艦隊は海軍卿によって管理されており、彼ら全員が自分たちの不正行為にはすべての責任を負います。以前は、国家のすべての問題や量刑の裁量はおのおのが自分の意見を主張し、責任を負う枢密院で議論され決定されました。先の国王チャールズ二世が政治顧問団や閣議を設立し、すべての重大な事柄を審議し決定し、そののち追認のために枢密院へ持ち込むようになって最初に我が国の政体のこのきわめて優れた部分を破壊したのです。ヨーロッパ諸国

の政府におけるこの我が国の会議の最初の例はフランスのシャルル九世⁶の時代であり、当時プロテスタントを虐殺することを決定したとき、彼はそれを会議に諮ることはせず、彼が閣議と呼んだ少数の人を選びました。そしてその系譜について考えてみると、国王と国民の双方にとってどれだけ致命的であったかは驚くにはあたりません。国王にとっては我が国の政体が政府のいくつかの部門に大臣を用意して彼らに失敗の責任を取らせるようになっており、国民の憎しみが国王に直接向けられることを防いでいるのに対し、この方法は逆に大臣を保護し、臣下の苦情すべてを国王に向けるようになっていきます。それは国民にも危険な仕組みです。というのはどのような失敗であれ、誰もそれらに対して責任を問われることがないからです。大臣らは署名入り文書によって自分たちを正当化するか、もしくはおそらく国王からの直接の指示だと主張して正当化するからです。それに我々はこれまで長い間そのようにしてきてしまったので、いまとなつてはもうそれを適切に処理することはできません。このなりゆきは国王と国民との間の頻繁な怨恨となり、その結末は誰にもわかりません。

(1)

イングランド常備軍簡略史

もし誰かが常備軍が奴隷制度、カトリック、イスラム教、異教信仰、無神論、そのほか何でもいいですが、そのようなものだということに疑問をいだかれるなら、最初にカルタゴのマトー⁷とスペンディウス⁸の物語とエジプトのママウケス⁹の話しを読むべきです。

第二に、ストラダ¹⁰とベンチボリオ¹¹の物語を読むべきです。そうすれば十七の地方で九千人のスペイン人の業績が見られるでしょう。その国は防備を固めた街が多くあり、オランダの貴族によって所有されており、ドイツ、イングランド、フランスから支援を受けていました。

第三に、コミンのフィリップ¹²の歴史を読むべきです。ルイ十一世¹³が二万五千人の兵で広大なフランスを隷属化し、ブルゴーニュの善良王フィリップ¹⁴による騎兵五百人の召集がそれらの地方の破滅となりました。

(2)

第四に、ラドロウの回顧録¹⁵を読めば、我々の自由を守るために召集された軍隊が議事を政治の駆け引きに使い、その行為によって全ヨーロッパが驚愕し、数年のうちに国家全体の精神に反して、また彼ら自身の仲間の半分の意見に反して、十数種類の政府を設立したのです。將軍の軍隊に対する影響力は強大であり、兵士の個々の意見がどのようなものであれ、彼は軍隊を機械装置の一部品として活動させることが出来るのです。

最後に、彼に常備軍反対論、市民軍論、市民軍改変論とそれらに対する反論を読んでもらいましょう。しかしこれらすべてを読んでみても彼が満足出来ない場合を考えて、ここでイングランドにおける常備軍の短い歴史を語りましょう。私はこの重大な不公正さの謎を最初から起源をさかのぼり、我々の中にどのようにして忍び込んで来たのか、いくつかの段階を示すつもりです。

この島からローマ人が撤退して以来、イングランドにおける常備軍について私が見いだす最初の足取りは、リチャード二世¹⁶の時代であり、彼はチェシャーで四千人の弓兵を召集しました。そして彼らはあらゆる場所で掠奪し、無銭宿泊し、打ち壊し、傷つけ、強奪し、殺戮を重ねました。そして後に、彼は議事を招集し、彼の弓兵で議院を取り囲み、議会の全権力を断念させました。そして当時作成された恣意的な制度を廃止しようとする努力を反逆罪としました。しかし、彼は後にアイルランドの反乱を鎮圧するために遠征を余儀なくされ、国民はその機会を利用して、彼を退位させました。

国家は常備軍の支配のこのような見本があったので、彼からチャールズ一世までのどの国王もヘンリー七世¹⁷によって設立された護衛兵を除いて、平時にいかなる戦力も維持しようとは試みませんでした。そしてその時代、対フランス、スコットランド、アイルランド、その他の外国や国内戦争のために召集されたいくらかの軍隊は存在しましたが、その軍隊は戦争が終わるといつもすぐに解散されました。そしてヨーク家とランカスター家とのすべての戦いにおいてどちら側が優勢であっても、彼らが常備軍を維持し続けようとしたことはありません。そのようなことが当時の長所であり、彼らはのちに暴君にはなりますが、自国を確実に奴隷化するよりはむしろ反対派を激怒させて自分たちの首や領地を没収される危険を冒しました。

(3)

またアイルランドではしばしば反乱が起りましたが国王に軍隊を維持させようとはし

ませんでした。軍隊が召集されればイングランドに来ることがわかっていたからです。したがって統治はきわめて不安定でした。イングランドがその国を支配して最初の三百年間は戦時以外には軍隊はいなかったのです。最初の軍隊が編成されたのはエドワード四世¹⁸の十四年であり、そのとき百二十人の弓騎兵と四十人の騎兵、それに四十人の騎士見習いがアイルランドの議会によって編成されました。それは六年後には八十人の弓兵と二十人の槍騎兵に削減されました。後にヘンリー八世¹⁹の時代の1535年にはアイルランドの軍隊は三百人であり、1543年には三百八十人の騎兵と百六十人の歩兵に増員されましたが、それが当時編成された軍隊でした。私は平和時の軍隊について述べています。アイルランドの反乱はしばしば起こったことですが、そのときは軍隊はもっと多かったのです。メアリ女王²⁰の時代には常備軍はおよそ千二百人でした。エリザベス女王²¹の治世の大部分においてアイルランド人はあからさまに反乱を起こしましたが、彼らが鎮圧されたとき、編成されていた軍隊は千五百人から二千人の間でした。それぐらいの人数のままチャールズ一世の1615年にストラフォードによって軍隊が召集されるまで続きました。

1602年²²にエリザベス女王が死亡したとき、プランタジネット朝とチューダー朝のすべての美德が失われたのです。彼女は地球上にイングランドの栄光を確立しました。彼女は最初に自国に貿易の利点を教え、フランスとスペインの野望を制限しました。オランダを援助しましたが彼らにもフランスにも大きな船は建造させず、マース川とシェルト川を自分自身の手中に収め、鍵を握っていました。そして規制されない海の支配権とともにキリスト教世界の女性調停者として死亡しました。これらすべてを彼女は年間三十万ポンドを超えない資金で実行し、国民から多くの税金を徴収することはありませんでした。

ジェームズ一世²³が王座に就くとすぐにエリザベス女王について我々が獲得した輝かしい支配は陰り、我々は周囲のすべての国家の軽蔑的となりました。我々が生み出したあの国によってさえも軽蔑され、海上でも我が国が侮辱され、アンボイナ²⁴、ポルルーン²⁵、セラン²⁶や東インド諸国の他の地域も占領されてしまいました。それによって彼らは莫大な利益を生む香辛料取引を独占したのです。また慣習的な儀礼も払わずに我が国の沿岸で漁をして、同時に六百万ポンド近くの未払い金がありましたがごくわずかな支払いをただけでブリル²⁷、ラメキン²⁸、フリシンゲン²⁹などの担保となる都市を我が国王が引き渡すようにと説き伏せたのです。彼は公の財産を浪費し、前女王の輝かしい治世にお

(4)

いて集められたすべての偉大な人物を当惑させ、ウォルター・ローレイ卿³⁰の首を刎ね、何の功績もない自分自身の寵臣を最高位に昇進させました。そして彼らの豊かさを維持す

るために独占権と無限のプロジェクトを認め、金銭で名誉を売り渡し、議会の承認も得ずに貢納金と貸付金を引き上げました。そしてこれらの苦情が持ち込まれたとき、のちにスペイン王家との婚姻に反対演説をした人にたいして行ったのと同様に、彼は多くの主要な人物を保釈も条件付き釈放令状もなく収監しました。彼はサマセット伯爵³¹と彼の妻に対するトマス・オーバーベリ卿³²殺人罪を自分自身と子孫に天のあらゆる呪いを求めたあとで特赦しました。そして伯爵がヘンリー王子毒殺の共犯だったからだと広く考えられています。彼は自分の娘婿を王国から追放することを許可し、ドイツとフランスにおけるプロテスタントの権益を減らしてしまいました。一方彼は九年間続けてスペイン王家との婚姻と巨富を望んではいませんでした。後に彼はフランスと不名誉な婚姻の取り決めをし、カトリック教徒に信仰の自由を与えました。そして実際にしばしば断言したように彼はローマカトリックの敵でもなく、また彼らが国王を退位させることや国王殺しの原理に反対もしませんでした。アイルランドでは彼はあえてカトリック教徒をおおいに激励しました。その政策は以後、現在の治世にいたるまで彼のすべての継承者によって引き継がれています。そしてこの政策は次の二つの点で彼らに役立っています。一つは、この政策によって彼らはアイルランドの住民を恐怖に陥れる常備軍を維持するための口実を得ることになりました。そしてもう一つは、彼らは住民をイングランドの臣下に対抗させて利用できるようになったのです。この治世において滑稽な「神の掟」³³という国王の原則が考え出されました。それはアジアの専制国家においてさえも今まで一度も耳にしたことのないものです。彼の政府の他の部分はシャラムチとハーレキン³⁴の混合であり、真剣に語るべきものではありません。それはあらゆる些細なことに対する布告や、ニュースについて語ることを禁じたり、議会への手紙とか、国王が年老いてなおかつ賢明であるという話とか、国事は国民の手の届かない所にあり、国民がそのようなことに関わるべきではないとか、同様なたわごとにしすぎません。しかし我々にとって幸運なことにこの国王はたいそうな臆病者であり、兵士戦いを嫌悪していたことです。したがって彼は我々に対して公然

(5)

と軍事力で刃向かうことはできませんでした。ついに彼は自分の息子チャールズ一世に王位を譲るために（多くの人々が考えているように）毒殺されました。³⁵

チャールズ一世はたいへんな偽善者であり、そのために聖職者のお気に入りとなりましたが自分自身にたいした力量もなく、（政治に関与すれば常に不運となる）聖職者に支配され、彼はイングランドのすべての自由の破壊者の道を猛烈に突き進みました。³⁶ 彼はその治世をとおして一貫して法律に違反した行動をとりました。彼は最初の議회를父の死因

を調査するという理由で解散しました。そのために彼は議会在議決して彼に与えた莫大な資金を失うことになったのです。³⁷ 彼はバッキンガム公爵の個人的な立腹のせいで同時にフランスとスペインと戦争に入りました。彼は愚かにもイングランドにとって永遠の不名誉となり非難されるべきこの戦争を実行したのです。カディス³⁸ とリー島³⁹ への滑稽な企てを見てご覧なさい。彼はペニントン⁴⁰ の艦隊をフランス軍の手に引き渡し、あわれなロシエルの住民を裏切りました。⁴¹ そしてフランス国内のプロテスタントの權益を完全に根絶させてしまいました。彼はローン、物品税、軍服と召集旅費、トン税、ポンド税、ナイト爵位、船舶税を議会の承認を得ずに引き上げました。そして臣下に地所の価値を調べるためにあらたに宣誓を求めました。きわめて重要なジェントリーと商人を多数、彼の課した恣意的な税金を支払わなかったという理由で投獄しました。海外へ追放したのものもあるし、より貧しい人々は兵士にしました。彼は兵士を無銭宿泊させ、彼らに軍法を適用しました。彼は無数に独占権を認め、森林の境界を破りました。彼は恣意的な法廷を設立し、高等宗務官裁判所や星室庁裁判所、名誉裁判所、請願裁判所など他の法廷を拡大しました。そしてそれらの法廷で最高位の人々にたいしても言語に絶する弾圧が加えられました。彼はブリストル伯爵⁴²、リンカン主教⁴³ に議会に出席しないように命令しました。また多くの著名な下院議員を拘束し、議会での言動の故に処刑しましたが、なかには何の理由もないものも含まれていました。そして人身保護法の特権を認めませんでした。また専制権力を主張した説教を認めなかったという理由でアボット大主教⁴⁴ を停職にして拘束

(6)

しました。他にもあらゆる理由が主張されました。彼は教会の統治を変えないことに決して同意しようとせず、宣誓を拒否したという理由でグロスター主教⁴⁵ を停職にしました。彼は最もいやしい奉仕者とたもとを分かつと考えるような愚かな横柄さを不思議に思うと述べて、議会对反対しているすべての専制的な大臣を支持しました。そして実際、彼は演説で、いやむしろ脅迫で、彼らを下男のように扱い、不忠で、反政府的で、腹黒い人間だと呼びました。彼は教会の意見を無視して革新を実行しました。彼は専制的な原則の人々、カトリック教の傾向のある人々、特にロード⁴⁶、モンタギュー⁴⁷ やマンウエアリング⁴⁸ などの扇動者たちを好みました。彼らの一人は議会で告発されていた人物であり、別の一人はローマカトリック教を勧めたかどで弾劾された人物です。そして三人目は上院で非難された人物でした。彼はカトリック教を禁じる法律を作らず、彼らを奨励し、ひいきにしました。彼は十二年間も議会を招集せず、その間壮大な君主然として恣意的に統治しました。彼はアイルランド人大虐殺を扇動しました。スコットランドの国璽のおされた

委任状を見せ、チャールズ二世のアントリム侯爵⁴⁹支持の手紙を見せ、またアイルランドを平定するために議会が派遣した援軍をチェスターの壁の下に六ヶ月間とどませ、また議会の意志とは反対に自分の信仰を誓ったあとで反逆者と条約締結にはいり、自国民と戦わせるために何千人ものアイルランド兵を呼び寄せました。彼の統治期間中のすべての圧政を数えあげればきりがありません。しかし、彼を支援する軍隊がなかったので彼の暴政は不安定であり、ついには彼の破滅となりました。彼は国民に莫大な額を強要しましたが、それでもきわめて多くの困難をともない、ほとんど彼の役には立ちませんでした。そのうえ、彼は多くの愚かな戦争や遠征に浪費したので、いつも借金暮らしをしていましたが、それでも彼はしばしば軍隊を召集しようとしていました。

彼はスペインとフランスとの戦争にことよせて何千もの兵士を集めました。彼らは無銭宿泊をし、立ち寄りところすべてで盗みをはたらき、破壊しつくしました。しかし海外での戦争が不首尾に終わり、国内で高まる要求に圧倒され、この軍隊を解散せざるを得ませ

(7)

んでした。1627年に彼は三千の騎兵をドイツで召集するためにオランダに三万ポンド以上送金しました。彼は恣意的な税金を強制しようとしていましたがこの件は狂いを生じ、議会に調査され、それを撤回する命令が下されました。彼の治世の十五年目に彼は八千人のアイルランド人をイングランドへ投入するために召集するようにストラフォードへ命令しました。しかし彼らがイングランドへ到着する前にスコットランド人が同様な圧力のために武器をとり、ノーサンバランドへ進軍しました。それにより彼は議会を開かざるをえなくなり、その目的はくじかれ、その結果、その軍隊は解散されました。彼はスコットランド軍に対抗するためにイングランドで軍隊を召集したあとただちに、彼らとロンドンへ進軍し、議会を解散させようとしていたのです。しかしこの軍隊は大部分が市民軍であり、この件が議会に知られたので、直ちに議会は議員であった士官、アッシュバーナム⁵⁰、ウilmott⁵¹、ポラード⁵²などを襲い、このもくろみは水泡に帰しました。この後、国王とスコットランド人との間で和解が成立し、それにしたがって両者の軍隊は解散されました。それから彼はスコットランドへ赴き、イングランドを侵略するように説得しようとしていましたが、それは実現せず、彼は議会にメッセージを送り、スペイン王へ貸し出すための軍隊として三千人のアイルランド兵を召集する同意を求めましたが、国王がその軍隊を他の目的に使用するのではないかと恐れた議会はそれを拒絶しました。国王がロンドンへ戻ってきたとき、彼は居酒屋、賭博場、売春宿から三百人から四百人の不道徳な連中を選び出し、彼らにご馳走をして、立派に武装させて護衛兵とした彼らを伴って下院へ入り、

議長席へ腰を下ろし五人の議員⁵³を引き渡すように要求しました。しかし陸路や河川か

(8)

ら肩にマスケット銃をかついで武装した市民が議会を守るために集まってきたので、彼はそれ以上の試みはしませんでした。この行為はひどく下院を怒らせて、彼らは将来の侮辱に対して自分たちを守るための護衛兵を選抜しました。すると国王は直後にロンドンを離れました。この少し前にアイルランドの反乱軍は現地では国王の権威を主張し、自分たちを正当化するために国璽の押された文書を見せました。それは真実であれ偽りであれ、どちらにせよ国民に大きな警戒心をかきたたせたので、国王はその戦争の指揮を放棄することを議会に同意しなければならなくなりました。しかしチャールズ一世は彼らにメッセージを送り、国王自らアイルランドへ向かうつもりだと告げました。そして自分の護衛のためにチェシャーで二千の歩兵と二百の騎兵を召集する命令を下したと告げました。それにたいして議会は反対し、阻止しました。このことにより我々は国民を奴隷化するために彼の治世ではどれくらいの数の兵力で十分だと考えられていたかがわかります。そしてそれを手に入れるために国王はどれくらいしばしば試みられたことでしょうか。

それから国王と国民との間で清教徒革命が勃発しました。その内乱で多くの血なまぐさい戦いが繰り広げられましたが、最も大きな戦いの二つはニューベリー⁵⁴とネイズビーの戦い⁵⁵でした。どちらも新しい軍隊が勝利しましたが、最初の戦いはロンドンの市民軍により、後者は未熟練の軍隊であり、それを国王はあざけて「新型軍」⁵⁶と呼んでいました。そして数年後、ウスターの戦い⁵⁷では地方の市民軍の大活躍により勝利がもたらされたのです。それにたいしてクロムウェルは自分の専制的な目的には不都合な道具であると思ったので怒りと軽蔑のうちに市民軍を追放しました。戦闘の結果として国王は捕虜となり、議会は囚われの身である彼と交渉して、同時に軍隊の一部は解散させることを議決し、残りの軍隊はアイルランドを制圧するために現地へ派遣されることになりました。それでこの軍隊は自分たちの中から活動家を選び、彼らが上下両院へ請願書を提出しました。自分たちが王国の問題に決着をつけるつもりであり、それが達成できるまでどの軍隊も解散しないという宣言でした。しかしその請願書が好意的には受け取られなかったので、彼らは国王の身柄を議会の委員会から確保し、軍隊を解散させようとしたという理由で十一人の主要な議員を反逆罪に問うこととして、国王と個別交渉に入りました。しかし国王は彼らの要求に応じなかったため、彼らはロンドンを占拠しました。そして議会在国王に将来の決着のために譲歩できる余地を残した議決をしていたにもかかわらず、彼らは国王処刑を決め、そのために、彼らの言葉によれば、議会を浄化しました。それは議会

に護衛兵を配置し、国王に賛成する議員全員を追放して彼らは国王を処刑しました。

このあと、彼らは五年間、議会に統治させ、イングランド、スコットランド、アイルランド国内の敵を征服し、ポルトガル王国を自分たちの条件の下に制圧し、海上での名声を回復し、いくつかの有名な戦場でオランダを征服し、我が国の貿易を確保し、歳出をきわめて節約して管理したので、公を犠牲にして私人によって獲得された土地はありませんでした。そして最後には自国の解体の法令を通過させ、国家を自由で公平な共和国にしようとしていました。軍隊はそれを恐れていたので、議会を解散させることが必要だと考えられ、クロムウェルは翌日に銃士隊二隊を議場に導き入れ、下院議長をその椅子から引きずり下ろし、みずから狂気じみた行動をとり、あるひとを売春仲介者と呼び、またある人を飲んだくれと呼び、議員を中傷し、軍人に道化師の笏杖を取り上げさせて議会に別れを告げました。彼らがこのような暴力をふるったあと、士官の委員会が新しい形の政府を作り、あ

(9)

らゆる州やイングランド、スコットランド、アイルランドの都市から一定の人々を選出し、これらの人々に最高権力を与えました。しかしすぐあとに彼らを追放し、それからクロムウェル自身が立ち、プロテクターと下院による新しい政府の装置を組織し、その結果彼が議会を招集しました。しかし彼らはクロムウェルの期待にそぐわなかったので、自分の協定書に署名しようとしなかったものを全員排除しました。そして残ったものも彼の目的にそぐわないものはまた侮辱的な言葉を使って追放しました。彼はそれからイングランドをいくつかの地域に分割し、主要な将軍や管理官を配置しました。彼らは横柄な態度で統治し、王党員を殺戮し、好き放題に税金を課しました。それからクロムウェルは確実に自分で国王になろうという意図を持ち、その目的のためにいつものように自分の嫌いなものを排除したのち、別の議会を招集しました。この議会に彼は統治の別の方法を提案しました。それは国民の代表による議会の他に貴族院の性質をもち、七十名からなる第二院に加えてもう一人の人物を任命するものです。この人物をなんと呼ぶかは空白のままにしておきましたが、それをこの価値ある議会は国王という名で埋めました。そしてそれをクロムウェルに申し出て、受諾して欲しいと要望しました。また彼に他の議院の議員を指名する権利を与えました。これに軍隊の高官が反発しました。これは自分たちが次に専制者となる希望を破壊するものだったからです。それで彼らは議会に対して国王の権力と統治に反対する演説を行いました。それでクロムウェルはその称号を拒絶し、護民官という名前のもとでより強大な権力を持つことで満足しました。後に彼はこれを「別の議院」と名付けました。というのは大部分の議員が軍隊の士官だったからです。しかしこの議院にも彼

は満足しなかったので、彼は怒りにまかせてこれを解散し、自分が死ぬまで議会を開かずに国家を統治しました。

彼の死後、軍は彼の息子リチャードを立て、彼が新しい議会を招集しました。しかしその手順は兵士の気性に好ましくなかったため、彼らは護民官に議会を解散させ、それから彼を廃位し、権力を自分たちが掌握しました。しかし権力を使いこなすことができず、共

(10)

和国を復活させ、すぐあとに再びそれを排除しました。なぜなら彼らは市民から軍事力を独立させたままにさせておこうとはしなかったからです。それから彼らは国家をウォリントンハウスで戒厳令で統治し、政府の執行機関のために安全委員会を選出しました。しかしそれは彼らが自由の保守者を選ぶまでの短期間しか続きませんでした。そしてそれも機能しなかったため、彼らはすべての連隊から二人の代表を選出し、この価値ある委員会で国家を安定させようとしていました。彼らが集まったとき、あるときは新しい議会を招集しようとしたり、またあるときは古い議会を復活させようとしたこともありましたが、結局古い議会を復活させました。このような手段によってすべてが混乱に陥り、モンク将軍にイングランドへ行軍する好機を与え、そして彼はきわめて狡猾に自分の役割を果たし、チャールズ二世の父親の頭を切り落とした軍隊の一部で国王を復活させました。

これはまさに軍隊をとまなう政府の真実で生々しい例であり、その軍隊はある主義のもとに、自由のために召集され、ほとんどが信心深く、真摯な人々で構成された軍隊でした。もし国内外の両方において非常に高い評判を獲得したこの軍隊が国民全体が武器もち訓練され、自由を求めて国民の脈拍が高く打ち鳴っているとき、これほどまでもひどい暴力を議会に対して用いて常に成功するならば、もしまんにち将来野心のある君主がふしだらで墮落した軍隊や、おべっか使いの僧職者や、売春婦の大臣や、どこかの破産した議会や、年金受給者の議会や、奴隸的で腐敗した国家において蜂起すれば、どのような事態が予測できるのでしょうか。

この手段によってお嬢さん育ちのように贅沢な君主であり、最高の偽善者であるチャールズ二世がやってきました。彼はたとえ自分自身はカトリック教徒でなかったとしてもきわめて強いカトリックびいきでした。しかし国民は軍隊にひどい目にあわされてきていたので、彼は喜びと熱狂で迎えられました。蜜月時代の議会は何でも彼の希望する法律を通過させ、それまでの君主が受け取った三倍もの金額である莫大な資金を一生涯彼に与えて、その上国王が好きなように使える数百万ポンドを与えました。これによって彼は

(11)

以前のどの国王よりも恣意的な権力を持てるという途方もなく大きな希望をいだいたので、そしてそのために彼は王国全体を墮落させ、弱体化させました。彼の宮廷は姦淫、泥酔、不信仰の場であり、国家元首の家族と言うよりは売春宿、もしくはバッカスの宴会のようでした。そしてそれほど時もたたないうちにこの汚染は国全体に広がり、猥褻でないことは流行遅れのように思われるようになり、公共の敵でなければ恥ずべきことだと思われるようになりました。これ以後に起こったすべての悲惨な出来事はすべてこれが原因であり、我々自身の破滅以外には消し止めることが出来ないのではないかと恐れるほどです。彼が玉座に着くとすぐにオリヴァーがフランスとの間に締結した有利な商業条約を王位篡奪者によってなされたものだといって破棄しました。フランスが我が国のすべての産物に課税することを許容し、そのことで輸入禁止にさせ、貿易収支で彼らが年間百万ポンドも輸入超過にしてしまいました。彼はダンケルクの重要な要塞を売り渡し⁵⁸、フランスにセント・クリストファー⁵⁹や北アメリカの他の場所を占拠させてしまいました。

彼はオランダと馬鹿げた不当な戦争を始め、議会在彼に莫大な戦費を支払ったにもかかわらず、彼はその資金を自分の不品行に費やしてしまい、オランダは我が国にたいして非常に有利な立場となり、チャタム⁶⁰の我が国の艦隊を焼き払ってしまいました。ついに彼は戦争を終結させるときに彼らに対して不名誉な和平条約を締結することになりました。我が国にとって永遠に続く不名誉となり、我が国の海上における名声はほんの数年前は議会にどのような法律でも好きなように書くようにと白紙委任状を送りつけていたのににもかかわらずその国によって恥をかかされるほど地に落ちてしまったのです。この戦争中にシティーは焼き討ちにあい、焼夷弾がホワイトホールで準備されたのではないかと大いに疑われています。彼はこのすぐあと、強大化するフランスに対抗するために三国同盟⁶¹を結び、それを維持するために議会から莫大な資金を受け取りました。それを彼は同じ同盟を破棄するために使ったのです。コヴェントリー氏をスウェーデンに派遣して同盟を破棄させました。そしてフランスと厳格な同盟を結びました。それは彼の妹の血縁によって締結されたのです。さらに彼は自由とプロテスタントの宗教を撲滅させるためにオランダに対して新たな戦争を始めました。しかし議会在戦争に反対し、支援してくれないことに気づくと、彼は戦争を宣言する前に彼らのスミルナ艦隊を捕捉しようとし、国庫を閉鎖し、フランスからの年金受給者へ身を落としたのです。彼の先祖は剣を手にしてしばしば

(12)

フランスから貢ぎ物を取り立てました。彼はフランスがその絶頂にたどりつくことを許しただけでなくそれを援助したのです。それを全ヨーロッパはそれ以後十分に感じ、嘆いたものです。彼はフランダースとドイツを従属させるために一万人を援軍として送りましたが、彼らの援助をえて、いくつかの大規模な戦闘をしました。彼はあらゆる国家の政策に反して彼らに木材、水夫、船大工、そしてモデルを送りました。それで彼らの海軍力は我が国とほとんど同程度にまで高められることになりました。そして彼らを訓練させるために彼は多数のイギリス船を賠償を要求することもなく私掠船船長によって捕獲させました。

この戦争中彼は刑法の一時停止を宣言しましたが、それはカトリック教徒を擁護するために意図されたもののように思われます。のちに彼から、上院からある法案を盗むようにとの指示がありました。彼が自らの治世の期間、カトリック教に賛同し、ひいきし、非国教徒を激しく迫害しました。そしてアイルランドで王位継承法を破棄し、彼らに地所を回復させ、カトリック教徒が地方自治体に居住する自由を与える布告を発しました。そして議会が何度も繰り返して反対演説を行ったにもかかわらずヨーク公をカトリック教徒であるだけでなく、フランスの利益代表者の一人である人物と結婚させました。⁶² この治世にあの呪い憎悪すべき政策が議会に賄賂を贈り、彼ら同士でイングランドの高位公職を分配し、また役職の不足を土地と金銭の下賜によって埋め合わせることによっておおいに増進されました。我々は誰でも黙従という無意味な言葉のもとに専制的な権力を擁護し、政体に反対であると公言しない限り教会や国家の役職には就かせてもらえませんでした。すべての神と人の法律よりもそれが優先されました。忌まわしいカトリック教徒の陰謀は抑え込まれて以来、致命的な経験を経てまったく真実である事が証明されました。そしてその部屋でプロテスタントは罪をでっち上げられ、人々はミールタブや、フィッツハリスや、ライハウス、ニューマーケットやブラックヒースの陰謀のように計略に乗せられました。そして虚偽の申し立てや、一団の裁判官と陪審員によって彼らはイングランドの最高の人物を何人か虐殺してしまいました。他の人々には過度の罰金を課し、エセックス卿を殺害したというもっともらしい嫌疑をかけました。そして我々を完全に破滅させるために、彼らは指示された人を選出しなかったイングランド中のすべての同業者組合から可能な限りすばやく、認可状を剥奪しました。しかし彼はもし自分を正当化するための軍隊を持って

(13)

いなければこのようなことをしようとは夢にも思わなかったでしょう。彼は最初議会軍を維持するつもりであり、それは数回検討されましたが、ハイド大法官⁶³がそのような軍隊は彼の父親の首を切り落としたものたちの軍隊であると主張して彼をうまく納得させました。また彼らは十あまりの種類政府を樹立し、それを打ち倒し、そして今度は彼自身の番かもしれないのです。したがって彼の恐怖心が野望よりも勝り、彼は議会軍を解散させることに同意しました。しかし軍隊がない恣意的な権力がどれほど無力で実を結ばないものであるかがすぐに実証されました。したがって彼は軍隊を手に入れるあらゆる方法を試みました。そしてまず彼はスコットランドで試みたのです。ローダーデイル公爵⁶⁴を使いスコットランドで法令を通過させ、それによってスコットランド王国は国王の召集に応じて二万の歩兵と二千の騎兵を集め、自国領土内のすべての地域に派遣される義務を負うことになりました。そしてこの法律は今日まで存在しています。ほとんど同時期に彼はイングランドで護衛兵を召集しました（それまでイングランドの政体では耳にしたことのない事柄です）。そして次第に彼らを増強し、恐ろしいほど強大な軍隊にまでなりました。最初、彼らはごく少数でしたが、わずかな人数をすこしずつ加えて騎兵中隊とか歩兵中隊とし、それから騎兵中隊や歩兵中隊の数を増やし連隊とし、第二次英蘭戦争までには軍隊を五千人近くまで増強しました。彼はそれからフランスと共同で戦争を始め、議会は彼にその戦費として二百五十万ポンドを与え、その一部として彼はブラックヒース軍と呼ばれているおよそ一万二千人を召集し（その将軍としてジョンバーグ元帥を任命し、アイルランドのカトリック教徒のフィッツジェラルドを副官としました）、この軍隊でオランダを攻撃するふりをしました。しかしその目的に使用する代わりに彼はこの軍隊をブラックヒースに駐屯させ、ロンドンのシティー周辺をうろつかせ、議会とシティーを動揺、混乱させたので、国王はついに彼らを解散せざるをえなくなりました。しかしそれに関していくつかの事故がおきたのです。第一に対オランダ戦争における失敗については大して勇敢さが試されることもなく、幸運の最高潮の歓喜の中にありました。次に、あの偉大なジョンバーグ将軍の寛大さを忘れてはなりません。その偉大な天才は自由民を鎖でつなぐような下劣な行動を軽蔑しました。そしてついにはこの軍隊自身が給与が支払われ

(14)

ないという理由で反乱を起こしました。これはその当時国内に広まっていた不満をつのらせ、国王は彼らをすすんで解散させました。しかし同時にオランダとの和平条約の条項に

違反して、彼は一万人の兵士をフランス軍に残したまま、ほとんどをカトリック教徒の士官の指揮下におきました。そこで彼らが出動した場合にはいかなる命令にも従うように奴隷的な方針になじませたのです。議会は開かれませんでした。国王にこれらの軍隊をフランスから呼び戻し解散するようとの請願が出されました。そして数回その目的のために法案が用意されたのですが、それを国王はいつも停会によって妨害しました。しかしついにその軍隊を呼び戻す宣言を出すように説得されましたが、同時に彼らに新兵を補充し、自発的にその任務に加わるように督励しました。そして他のものたちを主力軍によって抑圧し、拘留し、引き継いだのです。それに彼は新しく召集された連隊を解散しただけで、全部を解散したわけではありませんでした。というのはイングランドに士官の他に1673年に設立した五千八百九十の兵を保持していました。国王には同時に実行しようとしていた二つの偉大な計画がありました。それらはカトリック教と恣意的な権力であり、この軍事力だけでは自分の仕事を効果的に実行するには不十分だと思っていたのです。それゆえに新しい軍隊を獲得する方法を提案し、もっともらしい方法をとりました。それはフランスと戦争をするふりをするのでした。そしてこの目的のためにタイン氏をオランダに派遣し、オランダと厳正な同盟を結びました。そして同盟が締結されると直ちに議会を招集しました。議会は彼に百二十万ポンドを実際の戦争に入るために与えましたが、その資金で彼は四十日以内に二万人から三万人の軍隊を作り上げ、その一部をフランダースへ派遣しました。同時に彼は自分の軍隊をフランスにとどめて、オランダとの私的な講和を推進するためにフランス国王から相当額を受け取りました。したがって議会はフランスとの戦争のためではなく、自分たちを奴隷化する軍隊を召集するために莫大な資金を与えたのです。しかしこの頃カトリック教徒の陰謀事件が発覚し、国家を非常な騒乱に陥れたのでこの潮流をとどめる方法はありませんでした。したがって国王は議会を招集せざるを得ず、その議会は1678年10月23日に開会しました。議会は直ちにカトリック教

(15)

徒の陰謀と地上兵力に対処しました。その他に、五十七の委任状がカトリック教徒に与えられており、それは軍隊を召集するためでしたが、J. ウィルソン氏が連署していました。それに関して、国王が資金を支払えるなら近衛兵を維持するつもりであると書かれてあり、彼はロンドン塔へ収監されました。この事件は議会を激怒させ、直ちに軍隊の解散へ進み、1677年9月29日以後に召集されたものは全員解散すべしという法令を通過させました。そして国王に未納金の支払いに充てるようにと六十九万三千三百八十八ポンドを与えたのですが、彼はその資金を軍隊を維持し、議会を解散させるために使用しました。し

かしすぐあと別の議会を招集し、その議会は同様な協議を続け、軍隊を解散させる二番目の法律を通過させました。そのために新たに別の資金を与え、自分たちが指名した委員のロンドンチェンバーへ払い込むように指示しました。そして市民軍以外の常備軍をこの国において保持することは違法で、国民に対して大いなる苦情と迷惑であると決議しました。その結果軍隊は解散されました。これとは別に彼らはフランス駐在の軍隊について不平を述べ、再び国王にそれを思い出すように申し入れ、ある程度の効果がありました。というのは国王がこれ以上新兵を派遣せず、次第に消耗させたからです。この軍隊の解散は1679年から1680年にかけてでしたが、士官の他に五千六百名の兵がいました。このときから彼は決して国民と同意せず、カトリック教徒の陰謀を調査しているという理由で以後の三回の議会を解散させました。そして彼の治世の最後の四年間は一回も議会を招集しませんでした。そしてその仕事の仕上げとしてタンジールは破壊され、守備隊は撤収させ、イングランドの最も重要な港に配置しました。それは1683年から1684年に編成され、士官の他に八千四百八十二名の兵がいました。この国王の治世において、国会で彼の護衛兵が非難されなかったことは一度もありません。また議会から最小の賛成も得られませんでした。しかしそのような関係であったにもかかわらず、宮廷は市民軍に賛成しないどころか有用化することも決して認めませんでした。このように国王は少数の護衛兵を非常に巧妙にうまく大切にしたので、議会のあらゆる反対努力にもかかわらず数年のうちに強大な軍隊に成長したことがわかります。始めにチェックを受けない悪の成長を妨げることはきわめて困難なことなのです。

(16)

国王はアイルランドで士官を含み七千七百人に軍隊を増強させました。一方彼らはより多くの機会があった以前の治世では二千名を越えることはけっしてありませんでした。アイルランド人は少し前にクロムウェルによって完全に減少され、この国王の支援が無ければふたたび立ち直ることは出来なかったでしょう。しかしその真実は彼の軍隊はアイルランド人を支持し、アイルランド人の恐怖は彼の軍隊を支持することでした。この国王の支配の後半期では、この国家は完全に自由の感覚を失ってしまっていたので、彼らは束縛されることを好むようになっていました。そしてもし彼ら兄弟がより長生きしていたら、または彼の例にならっていたら、このときまでには我々はフランスと同様に大いなる奴隷になっていたでしょう。しかし我々にとって神の大いなる慈悲となったのは彼らが異なる性格だったからでした。横柄で、頑固で、偽善者で、フランスとローマの助言のみに従い、自分自身の暴力的性質に押されたのです。したがって彼は息が切れるまで早く走りづけま

した。彼が国王になるとすぐに議会の承認もえずに関税と物品税を占有しました。彼は法律家のならず者を選び、裁判官にしました。そして彼の野心のために誓約を放棄しないものは全員追放しました。それによって彼は何人かの貴族をロンドン塔から解放し、オーツ博士やジョンソン氏などを野蛮な刑罰で苦しめ、西部地方の数百もの人々を虐殺しました。恩赦を与える約束で騙して告白させ、コーン人を殺害し、特別恩赦の権限をウエストミンスターホールで宣言してもらい、モードレン・カレッジのフェローを自由保有権から追放して司祭のための神学校用に使い、そして脱走したという罪で軍人を絞首刑に処しました。彼は教会委員会を設立し、ロンドン大主教を停職させました。なぜなら彼はローマカトリック教に反対する説教をしたシャープ博士に同じ刑罰を与えなかったからです。彼は貴族やジェントリーを幽閉し、就任宣誓を放棄するとどうしても約束しなかったものを全員解職し、ローマカトリック教徒の枢密顧問官を裁判官、副長官、さらには治安判事に任命しました。そして議会で公開してこれをすべて確認させるために彼は兄が始めた特許状を取り上げる仕事を遂行しました。そして監視委員と呼ばれる一種の世を毒するものたちによって同業者組合を新しいモデルにしました。彼はローマからナンチオという人物を受け入れ、ローマへ大使を派遣しました。彼はサボイにカトリック教徒の神学校を建て、若者を墮落させるために、司祭を自分たちの僧服で歩き回らせました。そしてティアコネ

(17)

ルをアイルランド准将に任命し、プロテスタントを軍隊や、公職から全員追放し、フィットンをその王国の首相としました。(カトリック教徒であり、偽証が見破られた人物です。)彼はスコットランドで宣言を發し、そのなかで絶対的権力を主張しています。それに彼の臣下はすべて無条件で服従しなければならないのです。そのような特権はトルコ皇帝やムガル帝国の皇帝さえも要求したことがないものです。彼は良心の自由にたいする宣言を發布し、すべての教会で読み上げるように命令しました。そして七人の主教を拘留し、裁判にかけました。なぜなら彼らは嘆願書の中でそれに反対の意見を述べたからです。そしてその仕上げとして、我々の不運から救い出す希望が持てないように、彼はその国に偽りの皇太子を押しつけました。彼が王位に就くとすぐにモンマス公が上陸し、数週間で六千か七千の人々が結集しました。しかし彼らは武器も食糧も持たなかったので二千人にも満たない国王軍にたやすく敗北してしまいました。それは常備軍の帰結の悲しい成り行きを残しています。というのは庶民の最愛の王子がいて、国民に忌み嫌われていたカトリック教徒と戦い、それでもそれほどまでの少数の軍隊に敗退したのです。そして彼らの多くは彼の友人でした。権威者側の軍隊はそのようなものでした。それ以来ジェイ

ムズ二世は一万五千人から一万六千人へ軍隊を増強する機会を得て、それから仮面を脱ぎ去り、議会を招集し、傲慢な態度で演説し、軍隊を増強し、就任宣誓により資格が与えられていない士官を任命し、彼らを手放すつもりはないと議会で告げました。彼は歳出を求め、彼らの承諾を期待していると議員に知らせました。国王に生涯莫大な資金を与え、国王のプロテスタントの宗教に対するいつも変わらない言葉以外にはどのような保証も求めることを拒絶した忠実な紳士がたで、実際に国王が求めるものはすべて実施した人々にとってはほとんど予想していなかった事態でした。しかしそれは特別に例外的なものではありませんでした。というのは国王が議員の大部分を自分自身で選んでいたからです。しかしこの議会でさえも軍隊には反対でした。マキャベリの言葉が思い起こされます。すなわち、人間が完全に善であったりすることは完全に悪であったりすることと同様に困難なことなのです。しかしマキャベリがこの時代に生きていたとすれば、彼は自分の意見を变

(18)

えていたと思います。宮廷はこの事柄に大いに苦心しました。そして機知を示すために、彼らは我々にフランスが強大になり、オランダの軍隊がおおいに増強されたので、我が国とフランダース防衛のために同じ割合で強大でなければならぬと主張しました。そして市民軍に頼るわけにはいかないというのです。しかしこの浅薄な修辞学では議員には通用しないでしょう。彼らは答えました。我々は軍隊なしで千年以上も自国を防衛してきました。国王の真の力は国民からの愛です。自分たちは市民軍の能力を高め、その目的のための法案を提案するように命じました。しかしこれらすべては彼らの不正を成就するために役だっただけでした。というのは彼らは自分たちの仕事をすでにすませており、今や彼はそれにも関わらず軍隊を維持しようとしたのです。だから彼は議会を閉会にし、自分の治世においては二度と議会を開催しませんでした。そしてロンドンのシティーを驚かせ、自分の軍隊をヒュースロウヒースに気候が許す間は野営させました。それは議員のみでなく、国家全体を最大の恐怖と混乱に陥れました。彼の治世の末期において彼はイングランドで二万人以上に軍隊を増強し、アイルランドでは八千七百人余りに増強しました。この国王は政治において二つの致命的な間違いを犯しました。最初は彼の昔からの親友であった司祭と争ったことであり、彼らは彼の信仰にもかかわらず王冠をもたらせてくれて、最大限彼の専制政治を支持していたでしょう。いや、カトリックは、とくにその最悪の部分、すなわち、教会の支配は、彼らにとってはそれほど恐ろしいものではなく、すこしばかり料理法を考えれば味の良いものとなったかも知れません。しかし彼の周りには彼らの破滅によっての上がってきた別の種類の司祭がおり、彼は反対者の機嫌をとり、彼

らを採用し、彼らに良心の自由を与えることによって、より安楽なゲームを楽しめると思ったのです。その親切さはきわめて不合理だと思えたので、彼らの中でも賢明で冷静な人々は心からそれを信じることは決してしませんでした。そしてオレンジ公が上陸したときには彼に敵対しました。二番目の彼の間違いは自分自身の軍隊を怒らせてしまったことです。すなわち、アイルランドから連隊を連れてきてすべての中隊に非常に多くのアイルランド人カトリック教徒を任命するように命じたことです。それによって彼らははっきり

(19)

と彼がカトリック教徒でできるだけすみやかに空きを埋めて軍隊を改革しようとしていることを理解しました。その際に彼は国民の権利を侵害し、英国国教会と仲違いし、非国教徒のあやしげな人々と交渉し、自分自身の軍隊の希望に背いたのです。そういう事情で、軍隊は全員で団結して彼に反抗しました。そして手助けをしてオレンジ公を招き入れたのです。彼はその招請を受け入れて1688年11月5日にトーベイに上陸し、宣言を公布しました。先の統治のすべての弾圧を示し、[常備軍は維持したまま]自由議会を支持する立場を表明しました。そのなかで再び隷属的な状況に陥る危険がないように決定し、この革命が達成されればすぐに自分の外国軍を送還すると約束しました。彼の上陸の知らせがイングランド中に広まったとき、彼は国民の広範囲にわたる歓呼によって歓迎されました。彼はこの国のすべての正直な人々の手、心、祈りを受けいれました。みなが自分たちが長く待ち望んだ救いの時が来たと思ったのです。ジェームズ二世は自分自身の家族に見捨てられ、宮廷に見捨てられ、自分の軍隊にも見捨てられました。彼が立っていた地面は崩壊し、その結果、彼は自分の妃と子どもを先にフランスへ送り、すぐあとを自分も追いかけたのです。オレンジ公がロンドンに入ったとき、彼が上陸後に召集された多くの連隊のほとんどを解散しました。そしてジェームズ二世の軍隊はフェヴァシャムによって解散させられましたが、彼らの軍旗のもとに再び集合するように命じられました。それを軽率な行動だと考えた人もいましたが、法律に違反して召集され、専制政治を支持した軍隊よりは、革命が構築された原理に基づいて参集した軍隊を維持していた方が我々の利益となると考えてのことでした。その他にアイルランドの惨状は早急に支援が必要であり、これらの人々はそのような仕事に当てることも可能でしょう。オレンジ公はロンドンに入った数日後に貴族院を招集し、その後まもなくしてチャールズ二世の最後の三議会の議員を招集しました。そして両院から、政府の行政を執行し、当時のアイルランドの状態に特別な配慮をしていただきたい、また土地について委員会を選定するために回覧公式書状を発するようにとの請願を受けたのです。この期間中アイルランドは出血し続けており、ティアコ

(20)

ネルは軍隊を召集し、プロテスタントの武装を解除し、ランスター、ミュンスター、コンノートに彼らが所持していたすべての土地を没収していきました。これにより何度も一、二連隊を派遣することだけでしたが、援軍の要請がありましたが、それはできなかったのです。彼らに武器と委任状を送ったのです。その武器があればおそらくその王国をきわめて容易に鎮圧できるほどのものでした。しかしオレンジ公とジェームズ二世の軍隊は双方ともイングランドにおり、まったく援軍は派遣されませんでした。このような手段によってアイルランド人はロンドンデリーとイニスキリングをのぞくこの王国全体を手に入れたのですが、ロンドンデリーは十二月九日に城門を閉ざし、オレンジ公を支持するという声明を発表し、即座に援軍を派遣してもらいたいと請願しました。しかし三月二十日まで彼らは武器弾薬を手に入れることが出来ませんでした。そしてカニングムとリチャーズの援軍は4月15日にやっと到着したのですが、ただちに軍務を放棄し、以前国王によって州長官に指名されたランディーを伴って帰還しました。その町の防衛は困難であると弁解したのです。この背信にもかかわらず、包囲された人々の決心は非常に強く、最大の勇敢さを發揮して防衛を続けました。そして再び救援を求めたのですが、それはカークの指揮の下、六月七日までは到着しなかったし、これらの哀れな連中は実際に七月三十日まで解放されませんでした。七週間以上も前のことでしたが、彼が最初に入港したときにどうして出来なかったのでしょうか、なんの理由もないように思われます。我々は失望し疲れ果てたこれら哀れな連中の決心にこのようにして代価を払っています。

条件が合意されたとき彼らは王位に決着をつける予備行為として、二十八条項を決めました。しかしこの条項は「権利の宣言」に矮小化されました。それは十三条項であり、「平和時に常備軍を召集し、保持することは法律に違反する」という最も重要な項目に、「議会の承認がなければ」という語句を付け加えました。あたかも議会の承認という語句がなければ、それを合法的なものには出来ないか、もしくは議会の承認があればより危険なものではなくなるかのように。

(つづく)

あとがき

本稿は以下のパンフレットの翻訳です。全体は50頁を越えるものなので今回はその前半部分のみとしています。

A Short History of Standing Armies in England, London, 1698. (以下、*A Short History* と呼ぶ。) 1698年に出版されたこのパンフレットは例によって著者名は示されていないが、

1697年10月に出版された *An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a Free Government, and absolutely destructive to the Consitution of the English Monarchy*. London, 1697 と同様に John Trenchard (1662-1723) の著とされている。

注

- 1 1698年出版のパンフレット。John Trenchard の作とされている。
- 2 Charles II (1630-85; 英国王 1660-85), チャールズ二世 (1600-49)の子。清教徒革命中はフランスに亡命し、革命後の王政復古で王として帰国した。
- 3 Charles I (1600-49), ジェームズ一世 (1566-1625)の子。チャールズ一世は清教徒革命により処刑された。これによりチャールズ二世を含む家族はフランスへ亡命することになった。
- 4 First Earl of Strafford, Thomas Wentworth (1593-1641). 英国の政治家。チャールズ一世の補佐役として反動政策を推進、長期議会から弾劾され、処刑された。
- 5 William Noy または Noye (1577-1634). チャールズ一世の法務官であった。
- 6 Charles IX (1550-74; フランス王 1560-74)。
- 7 Mathos (?-237 BC)紀元前 241 年にローマに敗退したカルタゴでの反乱、Mercenary War (c. 240 BC)の首謀者の一人。 *Wikipedia*.
- 8 Spendius 同上 Mercenary War (c. 240 BC)の首謀者の一人。 *Wikipedia*.
- 9 Mamalukes または Mamluk. 奴隷出身の兵士。エジプトでは一般市民より上の階層で強力な軍事階層を形成した。9世紀から19世紀頃まで存在した。 *Wikipedia*.
- 10 Famianus Strada (1572-1649)。
- 11 Guido Bentivoglio (1579-1644)。ボローニャの都市貴族。枢機卿、政治家、歴史家。
- 12 Philip de Commines (1447-1511)、フランスの外交官。
- 13 Lewis the 11th (1423-83; フランス王 1461-83)、バロア朝第6代の王。
- 14 Philip of Burgundy (1396-1467)。
- 15 Edmund Ludlow または Ludlowe (c. 1617-1692)、王政復古後スイスへ亡命。死後、亡命先のスイスで1698年から1699年にかけて自伝 (*The Memoirs of Edmund Ludlow*)が出版された。これは1970年に肉筆原稿が発見されるまで、歴史家にとって重要な資料とされてきた。
- 16 Richard II (1367-1400; イングランド王 1377-99)。
- 17 Henry VII (1457-1509; イングランド王 1485-1509)、チューダー朝の初代の王。
- 18 Edward IV (1442-83; イングランド王 1461-70,1471-83)、ヨーク朝の祖;ランカス

- ター家のヘンリー六世を倒し、財政改革を実行した。
- 19 Henry VIII (1491-1547; イングランド王 1509-47)、ヘンリー七世の子。
- 20 Queen Mary (1516-58) イングランド・アイルランド女王 (1553-58)、スペインのフェリペ二世の妻;ヘンリー八世の娘;新教徒を迫害し旧教会を復活。
- 21 Queen Elizabeth I (1533-1603).「17世紀イングランド常備軍論争5(翻訳)」『教養・外国語センター紀要(外国語編)』第2巻第1号、438頁参照。
- 22 エリザベス一世は1603年3月24日午前2時から3時の間にリッチモンド宮殿で死亡したが、イングランドでは1752年1月1日までは3月25日を新年初日としていた。したがってこの3月24日は1602年となる。*Handy-Book of Rules and Tables for Verifying Dates with the Christian Era, &c.*, by John J. Bond, George Bell & Sons, London, 1875, pp.408-9. および *Wikipedia*。
- 23 James I (1566-1625; イングランドおよびアイルランド王 1603-25)、スコットランド王としてはジェームズ六世 (1567-1625)、メアリー・スチュアートの子;スチュアート朝の祖で王権神授説を信奉。
- 24 Amboyna または Ambon, Amboina マラッカ諸島の島およびその港町。1623年にアンボイナ島にあるイギリス商館をオランダが襲い、商館員を全員殺害した事件があった。日本人も犠牲になっている。
- 25 Poleroon アンボイナと同様にオランダに奪われた島。
- 26 Seran もしくは Seram, Serang, Ceram。アンボイナと同様にオランダに奪われたマラッカ諸島の島。
- 27 Brill 南ネーデルラントの港町。1585年から1616年までイングランドに占領されていた。
- 28 Ramekins ネーデルラント南西部、フリッシンゲンにある。砦があった。
- 29 Flushing ネーデルラント南西部、ワルヘレン島の港町、ネーデルラント独立戦争発端の地。
- 30 Sir Walter Raleigh (1552?-1618): 英国の探検家・軍人;エリザベス一世の寵臣。刑死。
- 31 the Earl of Somerset (c.1587-1645), 政治家、ジェームス一世の寵臣。
- 32 Sir Thomas Overbury (c.1581-1613)。
- 33 James I のとなえた「王権神授説」。
- 34 Harlequin, 16-18世紀のイタリアのコメディア・デラルテ (commedia dell'arte) や harlequinade の道化役。
- 35 寵臣バッキンガム公爵に毒殺されたという説があった。

- 36 1628年5月、「権利の請願」が議会から国王チャールズ一世に提出され、課税には議会の承認を得ることを求められた。
- 37 チャールズ一世は戦費を得るために1626年に議会を招集したが議会がバッキンガム公爵の弾劾手続きを始めたので翌年議会を解散し議会の指導者を投獄し、専制政治を行った。
- 38 Cadiz スペイン南西部、大西洋に面したCadiz湾に臨む港市、軍港。
- 39 Isle of Rhee もしくは Il de Re ビスケー湾近くの島。
- 40 Sir John Pennington (1568?-1646)、もしくは Penington。イングランドの提督。
- 41 Rochellers 「ラ・ロシエルの住民」フランスの港市。宗教戦争ではユグノーの拠点となり、リシュリユーに包囲された(1627-28)。
- 42 the Earl of Bristol, John Digby (1580-1653)
- 43 Bishop of Lincoln, John Williams (1582-1650)、皇太子時代のチャールズ一世の行動を批判したためチャールズ一世即位後に疎んじられ、議会への出席を止められた。
- 44 Arch-Bishop Abbot, George Abbot (1562-1633)。 *Wikipedia*。
- 45 the Bishop of Gloucester, Godfrey Goodman (1583-1656)。 *Wikipedia*。
- 46 William Laud (1573-1645)、英国の聖職者、清教主義の弾圧者;反逆罪で処刑された。
- 47 Richard Mountague もしくは Montagu (1577-1641)。 *DNB*。
- 48 Roger Manwaring もしくは Maynwaring (1590-1653)。 *DNB*。
- 49 Randal MacDonnell, 1st Marquess of Antrim (1609-1683)。 *Wikipedia*。
- 50 John Ashburnham (1603-1671)。チャールズ一世の廷臣。 *Wikipedia*。
- 51 Henry Wilmot (1612?-1658)。チャールズ一世の廷臣。 *Wikipedia*。
- 52 Sir Hugh Pollard, 2nd Baronet (1603-1666)。チャールズ一世の廷臣。 *Wikipedia*。
- 53 John Pym, John Hampden, Denzil Holles, William Strode, Sir Arthur Haselrig の五人。 *Wikipedia*。
- 54 Newbury 17世紀の清教徒革命中に議会派と王党派の抗争の舞台となった。
- 55 Naseby イングランドの村;清教徒革命中、王党軍が議会派軍に大敗北した地(1645)。
- 56 原文は“New Nodel”となっているが、“New Model”の誤りか、もしくは“New Nodel”ともじったものかも知れない。
- 57 the Battle of Worcester クロムウェルがスコットランド軍を破った戦い(1651)。
- 58 チャールズ二世は財政難のためヨーロッパ大陸の重要な戦略拠点であるダンケルクをフランス王ルイ十四世におよそ375,000ポンドで売却した。(年間維持費がおよそ321,000ポンドかかった。) *Wikipedia*。

- 59 St. Christophers セントクリストファー島、別名セントキッツ島は1493年にクリストファー・コロンブスによって発見され、1624年にアイルランド人の商人トーマス・ワーナー卿率いるイギリスの開拓団を引き連れて、白人のカリブ海及びリーワード諸島最初の入植地となる。フランス人も島に入植し、島の中央部分はイギリス領、島の南部と北部の部分はフランス領に分かれるが、1628-1713年までイギリスとフランスと分割領有されていた。『ウィキペディア』。
- 60 Chatham イングランドの都市;ヘンリー八世時代からの軍事都市:王立海軍工廠がある。
- 61 Triple Alliance (1668) イングランド、スウェーデン、オランダの対フランス三国同盟。ルイ十四世のフランスに対抗しようとした。
- 62 のちのジェームズ二世 (1633-1701; イングランド・アイルランド・スコットランド王 1685-88); チャールズ二世の弟。メアリー・オブ・モデナ (Mary of Modena) と1673年に成婚。
- 63 Chancellor Hyde, 1st Earl of Edward Hyde, クラレンドン (1609-74): 英国の政治家・歴史家。
- 64 the Duke of Lauderdale, Sir John Maitland, 1st Duke and 2nd Earl of Lauderdale, 3rd Lord Thirlestane KG PC (1616-1682), スコットランドの政治家。 *Wikipedia*.